
親友へ・・・

美奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友へ・・・

【Nコード】

N0093A

【作者名】

美奈

【あらすじ】

久しぶりにコナンと蘭に会いに来た、平次と和葉。ところが平次とコナンにとんでもない悲劇が・・・

FLIE 1 久しぶりの再会と突然の悲劇

プロローグ

大阪のお騒がせ二人組みは東京に向かっていた。

「なあ平次。」

「なんや？」

「はよ会いたいなあ。蘭ちゃんたち。」

「そやな。」

このときは誰もわからなかった。

これからおきる、とんでもない事件を。

そう・・・。

東の名探偵、そして西の名探偵もを巻き込むとんでもない事件を・・・。

FLIE 1 久しぶりの再会と突然の悲劇

「あつ！和葉ちゃん、服部君。こっちこっち！」

蘭は手を振り場所を知らせた。

「蘭ちゃん！久しぶりやな。」

「よお！工ど・・・ヒイ・・・！」

平次はすべて言い終わらないうちに言葉を止めた。

なぜかというと、蘭の前で使うような笑顔を浮かべつつも、平次に對して、怒りのオーラを出していたのだ。

「どしたん？平次。」

「いや・・・なんでもあらへん。」

「（言ってみる・・・蘭たちの前で“工藤”って呼んでみる・・・どうなるかわかるよな？）」

といわんばかりのオーラを出していたのだ。

「どうしたの？平次兄ちゃん。」

「いや・・・久しぶりやな、ボウズ。」

「うん！」

「（怖いで工藤・・・めっちゃ怒つとる・・・。）」

「平次、うちら買い物してくけど、どうする？」

「せやな・・・俺はこのボウズとその辺ぶらぶらしとるわ。」

「じゃあそれでいい？コナン君。」

「うん。いいよ。」

「ほな、4時に駅前な。」

「おう！」

そして蘭たちがいなくなるのを 確かめた後、

「ちよつとは成長したな。」

「なにがや。」

「“工藤” って呼ぼうとして止まっただろ？」

「あれは、お前が怒ってんのがわかったからや。」

「そーか？別にそんなつもりはなかったけどな。」

「お前は分かりやすいんや！」

「じゃあ聞くけど、怒らせたのは誰かなア？平次君？」

「・・・俺です。」

「わかっていればよろしい。」

「（あゝくそ！工藤の奴・・・）」

「なんか言いたそうだな。」

「べ、別に。」

それから平次とコナンは最近あった事件のこと、この間のサッカーの試合や、野球の試合。

高校生に戻った気持ちで話していた。

この後、悪魔の魔の手が差し伸べられるとも知らずに――。

人通りの少ない路地にさしかかったとき、突然、

「きゃああああああああああああ！！！」

「「?!」」

「なんや？今の悲鳴？」

「とにかく行ってみよう！」

「おらおらどけえー！！！」

「服部危ない！！！」

前から、包丁を持った40代ぐらいの男が走ってきたのだ。

そして、先頭を走っていた平次をかばい、コナンが平次の前に飛び出したのだ。

ドスッ！！

鈍い音と一緒に、コナンが真っ赤に染まっていった。

「おいっ！工藤！」

「つつ・・・！」

「おい工藤！しっかりせー！」

「・・・。」

コナンは気を失ってしまった。

「（俺を・・・俺をかばって工藤は・・・。）」

平次もコナンが刺されたショックによって、気を失ってしまった。

そこへ、悲鳴を聞いて、買い物帰りの哀が通りかかり、

「工藤君！服部君?!」

そして、二人の体は、米花緊急病院に運ばれた。

そう、これが事件の始まりだった。

FLIE 1 久しぶりの再会と突然の悲劇（後書き）

作者のあとがき

はじめまして

初の投稿になります、美奈です。

言葉がところどころおかしいですが、お許してください。
それでは

FLIE 2 夢の中で

FLIE 2 夢の中で

平次は、救急車で病院に運ばれる途中、ある夢を見ていた。

「ここはどこや・・・？」

平次がいたところは、誰も手を加えてないような、きれいな花畑だった。

「綺麗なことやなー。和葉にも見せてやりたいわ。」

そんなことを言いつつ、平次はどんどん進んでいった。

「それにしても、ここはどこやねん。どこが出口なん。」

そして、目の前に人が倒れていた。

「ん？誰や？！」

そこにはコナンが倒れていた。勿論血まみれで。

「どしたん？！工藤？！」

だが返事はない。脈もない。そして平次は思い出した。

「そうだ……。工藤は俺をかばって・・・俺のせいで死んでもうたんや・・・。」

そう思うと意識が遠のき、花畑の中でも平次は、気を失ってしまった。

そのころコナンも同じく、夢を見ていた。

それも、平次と同じ、花畑の中で。

「ここは・・・どこだ？」

見渡す限り花、花、花。

「もしかして俺、さっきで死んじゃったのか？」

だが誰も答えない。

「まあ、それまでの運命だったんだな。さっさと認めねーと、幽霊とやらになっちまうかもしれねーしな。それに“真実はいつもひと

「つ」だしな。」

のんきなことを言いながら、歩いていた。

「ん？誰だ？あれ。」

そこには平次が倒れていた。

「おい！服部！」

だが、平次は気を失っているだけだった。

「脅かしやがつて。俺も一眠りするとするか。」

そしてコナンは眠りについた。

それこそ、小学生のような、安らかな顔をして。

このあと信じたくない真実が待っているとも知らずに。

FLIE 2 夢の中で（後書き）

作者のあとがき

作者「さあ〜ゆつくりお休み。コナン君。」
コナン「寝てられっか！服部は?!」
作者「さあ〜。」

平次ファンの皆さんすみません・・・。

FILE 3 記憶

FILE 3 記憶

病院に着くなり、コナンの手術は始まった。

一刻を争うほどの重症だったのだ。

「コナン君・・・死なないで・・・コナン君・・・・・・・・新一・・・

！」

ふと蘭の頭の中に新一のことが浮かんた。

「なんでこんなときに新一とコナン君がかぶるんだろう・・・コナン君・・・新一みたいに突然いなくならないでよ・・・・・・・・ね？」

そして平次は・・・。

和葉と静華と平蔵が病院についていた。

「それで、平次の容態は？」

「彼は目の前で人が指されたのを見て、気を失っているだけです。しかし・・・。」

「しかし・・・なんですか？」

「さつきも言いましたとおり、目の前で人が刺された、それも自分より小さな子が。自分が何もできなかったという罪悪感とそのショックで記憶がないかもしれません。もし犯人を見たのならなおさら。」

「ちゅーことは・・・。」

「もしかしたら、記憶喪失になるかもしれませんが。一時的な、事件当時のことだけ。」

「キオクソーシツ・・・？」

そして、コナンの手術が始まって、5時間がたとうとしていた。そして、手術中のランプが消えた。そして医師が出てきた。

「コナン君の状態は？」

「幸い、一命は取り留めました。あれだけ出血してて助かったのが不思議ですよ。もう少し運び込まれるのが遅かったら、死んでいたかも知れません。」

「あ、ありがとうございます！」

蘭は涙ながら言った。

「あと・・・服部君のほうは？」

「ああ、彼なら、気を失っているだけです。特に目立った外傷もありませんし。」

「よかったあ～～。」

蘭は心底そう思っていた。コナン君が怪我をして、服部君まで・・・と最悪の状態まで考えていたのである。

「彼の病室は？」

「105号室ですよ。あの子は、同室にしておきますね。」

「ありがとうございます！」

そして、蘭と小五郎は平次の病室に行った。

平次の病室の前には、和葉が立っていた。

「どうしたの？和葉ちゃん。」

「あ・・・蘭ちゃん・・・うわああああん！」

「ど、どうしたの？」

「平次が・・・平次が！」

蘭が来る少し前、平次は、意識を取り戻した。

小五郎は居づらかったので、煙草をふかしに行った。

『ここは・・・？』

『平次！気がついたん?!』

『平次・・・？誰や？それにあんたも・・・』

『平次・・・覚えてへんの？』

『和葉ちゃん。お医者さん呼んできてくれへん？』

『あなたは誰だかわかりますか？』

『ワカラン・・・』

『なぜここにいますのかわかりますか？』

『ワカラン・・・』

『先ほどまで誰とどこにいたか覚えてますか？』

『イヤ・・・』

『こちらにいる3人の名前、分かりますか？』

『・・・イヤ、ワカラヘン・・・』

『では、2 + 5は？』

『7・・・』

『このボールペンの芯を出してください。』

カチッ・・・

『お疲れ様でした。それではご家族の皆様、友人の方、別室へ。』

『彼は、一時的な記憶喪失です。』

『『『・・・』』』

『先程、少しお話した通り、彼は目の前で小さな子供が刺され、自分が傍にいたにもかかわらず、何もできなかったという罪悪感で、ショックのため一時的に記憶が飛んでしまったのです。しかし、身内の方や、親しい方の名前すらわからないとなると、もしかしたら犯人の顔を見た可能性があります。でも、生活には支障はありません。普通の生活はできます。』

『そうなんだ・・・』

『事前にお医者さんにその可能性があるって言われたのに、いざ平次に忘れられると・・・』

『そうだよね・・・』

「コナン君は大丈夫なん？」

「一命は取り留めたらしいよ。」

「ほんならコナン君とこいこか。」

「うん。」

FLIE3 記憶（後書き）

作者のあとがき

コナン・平次「さあ〜くう〜しゃあ〜!」

作者「は、はい？」

平次「どうしてくれるんや? いいとこなしやんけ？」

作者「あつ・・・いや・・・その・・・」

コナン「なんで俺が刺されるんだよ?!」

作者「・・・・・・・・・・。」

コナン「ん？」

『作者逃亡』

コナン・平次「はああああ?!」

この FLIE3 記憶は、親友へ・・・で一番と言っていいほど自信がありません。

もう内容がわからない!

という方。

ごめんなさい・・・。

FLIE 4 衝撃の事実

FLIE 4 衝撃の事実

105号室前

「入るよ?」

「ああ、蘭か・・・コナンならまだ寝てるぞ。麻酔がまだ効いてるんだとさ。」

「そっか・・・」

「・・・っん?」

その場にいた全員が小さなつめき声のするほうへ、向いた。

「コナンくん・・・?」

「ここは・・・?」

「米花緊急病院よ。まだどつか痛む？」

「ちよつとね。」

「ほなあたしお医者さん呼んでくるわ。」

「うん。お願い。」

お医者さんにより、一通りの診察が終わった。

「特に異常ありませんし、順調に回復すれば、1ヶ月ほどで退院できるでしょう。」

「ありがとうございます。」

「それではお大事に。」

「ごめんな、コナン君。平次がおったのに。」

「平次兄ちゃんのせいじゃないよ。ボクが飛び出したんだから。」

「えっ？」

「最初は、平次兄ちゃんが先頭を走ってたんだ。だけど、前が40代ぐらいの男の人が包丁持って突進してきたんだ。それで平次兄ちゃんが危ないって思ったらボクつい・・・」

「バツカヤロー！何考えてんだ！もう少しで死ぬとこだったんだぞ？！」

「ご、ごめんなさい……。でも平次兄ちゃんは助かったんだよね？」

「おい、どうなんだ？蘭。」

「それが・・・」

「まさか・・・」

コナンは隣のカーテンを開けた。

「あっ！コナン君！」

「服部？！」

「あら、コナン君・・・だったかしら。どうしたん？もう起きてもええの？」

「平次兄ちゃんは？」

「大丈夫よ。けど、記憶がなくて、もしかしたらコナン君のことも・
・」

そこまで静華が言うと、コナンは、

「ハハ・・・嘘だろ？服部・・・」

コナンは気を失った。

FLIE 4 衝撃の事実（後書き）

作者のあとがき

作 いやあ、バタバタ倒れちゃって。どーすんの？

コ・平 お前がやったんだろ？！

作 だからって、自分で防げばいいじゃん！

コ・平 防げるのか・・・？

作 いや！無理。不可能！

コ・平 なら言っな！

FILE 5 真実

FILE 5 真実

「（おい・・・服部嘘だよな？お前が俺のこと忘れる・・・？そんなことあるはずが・・・）」

「・・・ん？」

「お！目え覚ましたで。このボウズ。」

「よかつたあゝ。目が覚めて服部君の病室に走って行ったかと思うと、また倒れちゃうんだもん。」

「倒れる・・・？俺が・・・？・・・服部？！」

「コナンは子供の言葉遣いも忘れて、平次の名を呼んだ。」

「なんや？ボウズ。」

「俺・・・誰だか・・・わかるか？」

「分かるで。さっきこの姉ちゃんに教えてもろた。江戸川コナン。親が外国におるからこの姉ちゃんが預かつとる。」

「そうじゃなくて・・・！」

「？」

「ねえ、蘭ねえちゃんたち。」

「なあに？」

「ちよつと平次兄ちゃんと2人だけで話したいんだけど・・・いい？」

「え？いいけど・・・」

「ありがと。」

「それじゃわたし達、コナン君と服部君の着替え、取ってくるね。」
そして蘭たちは外に出た。

「なあ、服部・・・もう演技はやめにしようぜ・・・？」

「なんのこつちゃ？ボウズ。」

「俺はボウズじゃねえ！」

「おお、スマン、スマン。えっと・・・江戸川コナン君だったかな・・・」

「俺は・・・俺は“坊主”でも“江戸川コナン”でもねえ!“工藤新一”だ!」

「誰や?その・・・工藤新一ってヤツ・・・」

「ほんとに覚えてねーのか・・・?」

「だから誰やねん?!それに年上の人に対する話し方。姉ちゃんに教わらんかったんか?」

「なあ、今から話すことはすべて本当のことだ・・・。信じて・・・くれるか?」

「お、おう!」

「俺は・・・」

そしてコナンは話し始めた。

黒の組織の事、薬で小さくなった事、そして、俺の正体を知る数少ない人間が阿笠博士、灰原哀、両親そして平次だということ。そして・・・コナン・・・いや、工藤新一の良き理解者であり、親友だと言う事。

「ふーん・・・」

「・・・」

「分かった。」

「本当か・・・?」

「それじゃ、他の誰もいない時は“工藤”って呼んでいいんやな?」

「ああ。だから俺のことも“小学生の江戸川コナン”としてじゃなくて、“高校生探偵の工藤新一”としてみてほしい。」

「わかった。ほんなら、これからもよろしくな、工藤・・・」

「ああ。」

コナンは平次がわかってくれた。記憶が無くてもわかってくれた。それが嬉しかった。

「それと、俺が“工藤新一”だということは、誰にもしやべらないでほしい。」

「なんでや?」

「今おれの正体を知っているのは、お前を入れて5人。その5人は、

組織のことをよく知っている奴らだ。だが、何も知らない、組織がどれだけ残酷か知らない奴に言っても重荷になるだけ。それに、これ以上犠牲者は出したくねーんだ……。組織のことを知っている、もし奴らにばれたとき、殺される標的の1人になる。」

「なら俺も……」

「ああ。」

「なんでそんなこと話すんや?!」

「……言つとくが、記憶があつたときはお前が先に聞いてきたんだぜ?」

「……………」

「それに、俺はお前らを信じてる。」

「?」

「いつも味方でいてくれる。俺がもし組織と1人で戦うと言っても、最終的には、見送ってられる。いつも見守ってくれるやつらなんだ。俺の正体を知っているやつらは。」

「わかった。」

FLIE 5 真実（後書き）

作者のあとがき

作「はぁ・・・」

平「どしたんや？めずらしく元気ないやんけ。」

作「平ちゃん早く記憶取り戻せよ・・・コナン君かわいそうじゃん。」

「

コ「そうだぞ、服部。」

平「お前のせいやろ？工藤！お前何気に見方についてんなや！」

作・コ「へっ！」

FLIE 6 ライバルの訪問

FLIE 6 ライバルの訪問

次の日、目暮警部、佐藤刑事、高木刑事がコナンに事情聴取に来た。
「調査の結果、服部君を襲おうとした犯人は、最近米花町近辺に出没し、いままで3人も襲っている通り魔だとわかった。」

「（やつぱり・・・）」

「それで、コナン君に聞きたいんだが、その人の人相とかわかるかね？」

「うん。多分男の人。背は・・・高木刑事より少し低いぐらいかな？声は結構低くて、40代ぐらい。それで・・・」

「？」

「ボク、ちらつと見たよ、顔。」

「本当かね、コナン君！」

「輪郭はちよつとこつこつした感じで、眉毛は、平次兄ちゃんぐらいで、痩せても太ってもない人だったよ。」

「・・・こんな感じかな、ボウヤ？」

「こんな感じだった気がする。」

「よし！その絵を一般公開だ！全国指名手配だ！」

「ハッ！」

そして高木、佐藤両刑事は部屋を出て行った。

「コナン君、お疲れのところ悪かったね。それじゃワシもこれで。」

「ありがとうございました、目暮警部殿！」

「それにしてもコナン君よう覚えとったなあ。」

「たまたまだよ。」

「犯人、早く捕まるといいね。」

「うん。」

そして、その夜。

「よお。灰原。来てくれたのか？」

「まあね。」

「どうせなら昼間くればいいのに。」

「昼間じゃゆっくり話ができないじゃない。」

「それもそうか。」

「彼は大丈夫なの？」

灰原は、隣で爆睡中の平次を横目で見て言った。

「ん？・・・ああ、服部か・・・大丈夫だ。だが・・・」

「？」

「記憶がねーんだ。事件当時のことだけでなく、俺たちのことも。」

「それじゃ・・・！」

「ああ、記憶喪失つてやつ。一時的なものだとは言っていたがな。」

「それで？」

「あん？」

「あなたのことから、2人でなにか話したんでしょ？」

「ああ、組織のことや、俺が工藤新一だってことは話したぜ・・・」

「そう・・・彼、信じてくれた？」

「ああ。」

「それじゃ、私はもう帰るわね。」

「おう。ありがとな。」

そして灰原が帰ると、

「いつまで隠れてる気だ？怪盗キッドさん？」

「やはりばれてましたか。」

「あつたりめーだ。バーロー！」

「いつ頃から？」

「灰原が来る前。」

「そうですか。で？どうです、調子は？」

「まあまあだな。だがお前をここで捕まえる程ではないがな。」

「ほー。」

「んで何しにきたんだよ？」

「子供が通り魔に襲われ意識不明の重体。一緒にいた高校生も意識不明”ってニュースでやってたもんで、まさかと思って来てみただけです。元気そうだなによりです。」

「ハッ！キッドさんにそんなこと言われるなんて情けねーぜ。」

「・・・・・・。」

「それでは私はこれで。お大事に。」

「・・・っく！」

灰原とキッドがいるときは、隠していた痛みが襲ってきた。

「“重体”か・・・ほんとだな・・・。」

その夜コナンは痛みを堪えて眠った。

FLIE 6 ライバルの訪問（後書き）

作者のあとがき

コ「・・・・・・・・」

キ「どうした？探偵君。」

コ「なんでお前もでてくんだよ？！」

キ「作者が書きやすいんだとさ。」

作「そゆこと！」

FLIE7 激しい痛み

FLIE7 激しい痛み

「・・・・・・・・くう！」

次の日の朝もコナンに激しい痛みが走った。

そこへ朝の診察に来た看護婦が来た。

「だ、大丈夫？ボウヤ？今お医者さん呼ぶからね。」

「どこが痛むかな？」

「こ、この辺。」

コナンは自分のお腹を指差して言った。

「レントゲンの用意を！」

「はい！」

そして、蘭と小五郎が病院に着いた。

「おかしいですね・・・骨は折れていませんし・・・あつ！」
「どうしたんすか？」

「ほら、ここをよく見てください。小さなひびが入ってるでしょう？ここは、少しでも傷がつくと、相当の痛みがきます。たぶんあのボウヤは、昨日から痛みに耐えてきたと思います。」

「あのバカ！」

「これくらいひびなら薬でなんとかなります。薬を1週間ほど飲んでみて様子を見ましょう。」

「はい・・・。」

「・・・ということで、コナン君、君には、こっちの骨のひびを治す薬と、痛み止めを飲んでもらいます。ひびを治すのは、毎日3回食後に。痛み止めは痛むときに。わかったかな？」

「はい。」

「毛利君！」

突然目暮警部が病室に入ってきた。

「あ・・・これや失礼。コナン君、服部君、犯人が捕まったぞ！」

「ホントっ？！」

「ああ、朝早く自首してきたんだ。」

「はあ、よかった。」

「ほんまに。」

「あとは、彼の記憶が戻るのを待つだけですな。」

コナンは口ではよかったと言っていたが、まだ、疑問点が残っていた。

「（犯人が自首？意外にあっさりしてるな。4人も被害者を出して

）」

「なあ、警部ハン。なんかひっかからんか？」

「なんがだね？」

「だってそいつこのボウズ入れると4人も人襲おてんで？あっさりしすぎとちゃうか？」

「た。確かに。」

「（服部・・・）」

「それじゃもう一度調べなおしてみる必要があるな。それじゃコナン君、お大事に。」

「それじゃ、コナン君、私たちも帰るね。ちゃんとお薬飲むのよ？」

「はい。バイバイ。蘭姉ちゃん」

そして蘭たちが帰ると、

「お前本当に高校生か？」

「バー口！ああでもしねーと疑われるんだよ。」

「それもそやな。」

「・・・まだ何も思い出さねーのかよ？」

「ああ。でも・・・」

「でも？」

「なんか、お前のことは、昔から知ってるような気がするんや。」

「ほんとか？！」

「・・・ツウ！」

「だ、大丈夫か？！」

「ちょー待ってくれや・・・おもい出せそうなんや・・・」

そして、

「・・・つくつつつ！」

平次は倒れた。

「おい！服部？！しっかりしろ・・・って・・・そこで寝んなよ・・・。」

平次は寝てしまったのだ。そしてコナンは近くを通りかかったお医者さんに頼み、平次をベットまで運んでもらった。そして、布団をかけてやり、

「ゆっくりでいいからな・・・ゆっくり思い出せ・・・な？」

FLIE7 激しい痛み (後書き)

作者のあとがき

作「さあ、とうとうここまで来ました。」

コ「そうだな。」

平「苦労したよなあ。。。」

コ「いよいよ次は、本題(?)です!」

FLIE 8 親友へ・・・——平次編——

FLIE 8 親友へ・・・——平次編——

「うん・・・」

「平次、大丈夫？」

「えっと・・・和葉ちゃんとコナン君だっけ？」

「“ちゃん”はいらへんて！平次に“和葉ちゃん”なんて呼ばれるときしょく悪うてかなわんわ。」

「ほな、和葉。どうして君らがここにおんねん？」

「コナン君に平次が倒れたって聞いてきたんや。なっ？」

「うん！」

「ふん・・・。」

「もう大丈夫？どっこも痛くない？」

「ああ、大丈夫やで。」

「ほなうち学校行ってくるわ。」

「氣いつけてな。」

「服部、俺ちよつとトイレ行ってくる。」

「おう！」

和葉とコナンが行った後平次の表情が曇った。

「（俺、ほんまにこのままなんやろか・・・今の娘のことすら覚えてへん・・・“ちゃん”付けだときしょく悪い・・・？・・・あの娘は誰や・・・？なにがあったんや・・・？それにどうして・・・工藤？・・・お前が怪我しとんねん・・・）」

そして平次は手紙を書いた。

記憶が無い自分から、親友に宛てて・・・

親友へ

なんかこんなん書くのも恥ずかしいが、書いてみるな。
俺は今記憶がない。

お前のことも……。

こないだお前から、俺とお前はライバルやったと聞いた。

西の服部、東の工藤って並び称されとったらしな。

お前が小っこなってからはもうそれも無くなっただってな。

俺は今お前のこと覚えてへんけど、いつか思い出すさかい、それまで待ってな？

もし、一生思い出されんかったとしても、お前は俺のライバルや！
そして俺はずっとお前のこと、工藤新一として見てるさかい、安心
せえ……な？

それから記憶が無くてもずっとライバルでいよな？

いや・・・ずっとライバルでいてほしい。

お前は“今の俺”のことどう思ってるかは知らんけど、俺は、

・・・俺はお前のことライバルであり、親友でもある思てんで！

工藤新一として、同じ高校生として見てるからな！

服部平次

ここまで書き終わると、平次はその手紙を引き出しにしまった。

作者のあとがき

平「うーん・・・」

コ「どうした？」

平「どうしたらあの作者、へこましてやれるか考えてんねん。」

コ「え・・・」

平ちゃん、君も結構怖いなあ。（↑誰？）

FLIE9 親友へ・・・——コナン編——

FLIE9 親友へ・・・——コナン編——

その日は、コナンが少年探偵団を呼んで、みんなの写真を持ってきてもらった。

だが、写真だけ受け取ると、帰らせてしまった。

平次も疲れるだろうし、コナンの体調が悪くなかった。だからといって哀が止めてくれるとも限らない。昨日の夜には、痛みを堪え、普通に接していたのだから、そんなに酷くないだろうと思ったに違いないと考えたからだ。

「なんであいつら帰すんや？」

「あいつらはオメーの手に負えるやつじゃねーよ。あいつらも学校あるし、お前も疲れるだろーし、俺も・・・」

「俺も・・・なんなんや？」

「いや・・・別に。」

コナンは「俺も万全の体調じゃない。」と言おうとしたが、平次に余計に罪悪感を与えるだけだと思い止めたのだ。

「さて、始めるぞ。」

「何をや？」

「バー口！写真持ってきてもらったんだから、ゲーム方式で、記憶を取り戻そうって言ってんだよ。」

「あつそつか。」

コナンは少年探偵団に持ってきてもらった写真と、目暮警部に借りた事件当時の写真を平次に見せた。

「どうだ？なんか思い出すことねーか？」

「うん・・・なんか出てきそうなんやけど・・・」

「ちよつと休憩するか。」

もうかれこれ、2時間が経とうとしていた。

「そやな。俺ちよつとトイレ行ってくるな？」

「おう。」

平次が出て行った後、コナンは手紙を書いた。
記憶の無い親友に宛てて・・・

親友へ

なんだかこんな手紙書くのも気恥ずかしいけど、書いてみる。
シャーロックホームズフリーク歓迎ツアーの時、正体バレそうにな
った時、正直、ちょっと安心した。

蘭や他の人にバレそうになるときはすっげー焦るけど、お前るとき
は違った。

なんでだかはわかんねえけど、なんだか、仲間が増えた気がした——・・・。

バレちゃいけねー・・・

こいつまで巻き込んだじゃいけねー・・・

と思いつつも、お前なら大丈夫って感じがした。なにが大丈夫なのかって聞かれても困るけど、なんかそんな感じがした。

お前なら、俺のことを、“江戸川コナン”としてじゃなく、

“工藤新一”としてみってくれる。

同じ探偵として、高校生としてみってくれる。

そんな気がしたんだ。

それは今も変わらない。

今記憶が無くて、ずっと元に戻らないとしてもお前は、

“本当の俺”をみってくれる。

だから俺もお前のことが信じられるんだ。

お前がどう思っているかは知らねーが、俺は、

・・・俺は最高のライバルであり、親友だと思ってる。

いままでも——・・・これから——・・・

工藤新一

ここまで書き終わると、足音がしたので、急いで引き出しにしまった。

FLIE10 解き放たれた真実

FLIE10 解き放たれた真実

「なあ。俺は車椅子だけど、ちよつと散歩にいかねーか？写真とにらめっこしててもつまんねーし・・・。」

「そやな。」

そして、平次がコナンの車椅子を押して散歩にでた。

「いい天気やな。」

「ああ。そうだな。」

「ここが、米花公園。ここでよくサッカーをするんだ。それで元太たちが俺に勝てねーからって何回もやらすんだぜ。」

「そら勝てるわけないな。高校生相手に。」

「だろ？もうおかしくつてさ。」

そしていろいろ話しているうちに、事件現場へ足が向いてしまった。ちよつと、目暮警部や、高木刑事、佐藤刑事も現場検証に来ていた。

「おお！コナン君に服部君！もう大丈夫なのかね？」

「俺は大丈夫やで！」

「ボクも！」

コナンは本当は大丈夫じゃなかった。

「服部君たちも現場検証かね？」

「いや・・・ちよつと散歩や。」

「そういえば、犯人なんだがね。証拠不十分で釈放となつたよ。」

「そうか・・・。やつぱり犯人は別に？」

「ああ、名乗ってきたやつは、夢遊病患者だつた。」

「ふーん・・・。」

コナンがボソツと、

「服部、なんか思い出さねーか？」

「なんか・・・すごい形相で相手が突進してきて・・・そして・・・
・・・お前が・・・う！うわあああああ！！！」

「おい！服部！おい！！」

「どうしたんだね？！」

「平次兄ちゃんが・・・」

「高木！服部君を病院へ！」

「佐藤！車椅子のコナン君を病院へ！」

「ハッ！！」

そして平次は高木の車で。

コナンは佐藤の車椅子を押してもらい、病院へ行つた。

目が覚めたとき、すべての真実が解き放たれるとも知らずに・・・

「平次!!」

「・・・ん?・・・か、和葉?おかん?・・・親父?」

「今なんて・・・?」

「あれ?俺・・・和葉、俺なんでこんなところにいるんや?」

「平次・・・思い出したん?」

「思い出す・・・?・・・あつ!そうや!ボウズは?!あいつが俺の前に飛び出して、刺されたんや!!あのボウズは大丈夫なんか?・・・って和葉聞いとんの・・・ってうわああ!」

平次は何に驚いたのかというと、和葉が急に泣き出したのである。

「よかつ・・・た・・・へ・・・いじ・・・が・・・おっ・・・思いだして・・・くれつ・・・て・・・。」

「落ち着いてからしゃべろ!それにそんなに泣くなや!」

「そんな・・・ん・・・って・・・あたしが・・・ど・・・どれだけ・・・心配したと・・・おも・・・ってんの・・・!」

「そや!親みたいに心配してくれとつたんやで?!」

「あーもわかったから!それで、くど・・・やのーてあのボウズは・・・?」

「コナン君なら・・・さっきまで起きとつたけど、寝ちゃった・・・。」

「ほなまだ生きてるんやな?!」

「うん。」

「どこにおんのや?」

「隣のカーテンの向こう。」

隣でコナンは寝ていた。

「ほな、あたしお医者さん呼んでくる!」

「・・・異常なし！あと2、3日で退院できるでしょう。」

「すまんが、ボウズのほうは？」

「彼はまだ2、3週間ほどかかると思います。」

「・・・酷いんか？」

「1ミリほどのひびが1つ入っているだけです。今は薬で治療中です。」

「そうか・・・。」

「服部君！犯人が捕まったぞ！」

目暮警部の大きな声で、コナンの起きてしまった。

「丁度良かった。コナン君にも見てもらいたいのだが。」

そういつて1枚の写真を取り出した。

「この人・・・！」

「コナン君が見たという人はこの人かね？」

「うん！」

「服部君は？」

「こいつ10年前の・・・。」

「ん？服部君知ってるのかね？」

「ああ。10年前、親父にくっついて事件現場に行ったとき、そのときの犯人や！確か名前は・・・。」

「西河拓也・・・。」

「お、親父・・・？」

「連続通り魔として、刑務所行きやったな・・・釈放されたんか？」

「はい。2週間前に。」

「本人は認めてるんか？」

「はい。」

「なら決まりやな。」

「はい。」

FLIE 10 解き放たれた真実（後書き）

作者のあとがき

作「最初に皆さんに一つ謝りたいことがあります。」

コ「お？珍しいな。俺を痛めつけたお詫びか？」

作「んなわけねーだろ！（↑新一風♪）」

平「なら俺へりお詫びかいな？」

作「んなわけねーだろ！！（↑またまた新一風♪）」

コ「んじゃなんなんだ？」

作「それは前回の 作者のあとがき を忘れてしまいました。」

コ「そんなもん誰がきずくか？！」

平「せやせや、そんなもんなくても困まらへんて。」

作「それもそーだな。。。」「

平「きずくの遅っ！」「

コ「ということでもうすぐ完結！ここまで読んでくれてありがとう
！」

FLIE 11 親友へ・・・——いつまでも変わらない——

FLIE 11 親友へ・・・——いつまでも変わらない——

こうして西と東の名探偵を巻き込んだ連続通り魔事件は幕を閉じた。
コナンは2週間後退院した。

そして、1ヶ月が経ったある日、事務所の電話が鳴った。

「（なんか嫌な予感がする・・・）」

その日、蘭は部活に、小五郎は麻雀に行っていて、コナン一人だった。

「はい、毛利探偵事務・・・やつぱりお前か・・・。」

「なんや？やつぱりって。」

「いや・・・嫌な予感がしたんだ。」

「嫌な予感って失礼なやつぢやなあ。」

「今日は何のようだ？」

「お前に渡したいもんがあるんや・・・。」

「俺に？」

「3時間後、米花公園で待つとるさかいな。」

「ちよ、ちよつと待て・・・って切れてやがる・・・。」

「俺に渡したいもの？そーいやアレ、まだ渡してなかったな・・・

丁度良い。今日渡すか。」

そして3時間後――・・・。

「よお、工藤！どうや、腹は？」
「もう大丈夫だよ。」
「そっかそれでお前に渡したいもんってゆうんは・・・」
「ちよっと待て！」

「なんや？」

「俺も渡したいモンがあるんだ。せーのでだそうぜ？」

「よっしゃ！せーの！」

そして同時に2人とも手紙を差し出した。

「へ？手紙？」

「は？手紙？」

そして2人は笑った。

誰がどう見ても、仲のいい兄弟にしか見えないが、2人にとっては、親友が笑い合ってるだけのことだった。

そう・・・

ライバルという名の親友と共に・・・

}
f
e
n
}

作者のあとがき

作「全4回の投稿で完結してしまいました。」

平「ちなみにFLIE11で完結やで。」

コ「こんなしょぼい小説を読んでくださった皆様、そしてこのあとがきまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。管理人共々、感謝の気持ちでいっぱいです。

また連載小説を投稿する予定ですので、飽きずに読んでってください。

感想をいただけると作者の励みになります。

よろしく願います。」

番外編 + α 喧嘩するほど仲がいい?!

親友へ・・・ + α

番外編 + α 喧嘩するほど仲がいい?!

平次の記憶喪失事件から1ヶ月がたったある日。
あのお騒がせ2人組はまたまたやってきた。

「らぁんちゃん!」

「和葉ちゃん!」

「よぉ!ボウズ!」

「・・・。。。」

「・・・おい?」

「・・・。。。」

「・・・なぁ、姉ちゃん。ボウズどうしたんや?元氣ないみたいやけど。」

「さぁ。朝からあんな調子よ。」

「アンタがきたからとちゃう?」

「アホ!そんなわけあるかい!」

実は和葉の意見が正解だった。
この色黒男が来たから・・・

それもアポなしで。

平次が来ることを知らされたのは今日の朝。

蘭が出かける支度をしていたのでコナンは「どこかいくの?」と聞いた。

そしたらあの2人組が来るというではないか。

コナンが怒るのも無理ない。

「おい。工藤?」

「・・・あんだよ?」

「なに怒ってるんや?」

「べつつに。オメーがアポなしで来たのなんか怒ってねーよ。」

「(めっちゃ怒つとる・・・)」

「どこ行く? 蘭ちゃん。」

「そおねえ・・・。デパートでおそろいの服買わない?」

「いいね!」

「・・・げっ・・・」

「平次、うちら・・・」

「俺、ちよつとこのボウズとその辺探検しとるわ。ほな!」

「あつちよつ平次!」

「今回は逃げられたな。」

「ああ。もうゴメンだぜ。」

コナンはさっきまでの怒りを忘れていた。

「これからどうする？」

「どっか案内せえや。」

「どっかってどこだよ。」

「どこでもええ。」

そしてコナンがニヤッと笑った。

「どこでもいいんだな？」

「お、おう。なんや？」

「んじゃ決定♪」

「どこや？」

「それはついてからの楽しみ♪」

「なんやそれ……。」

そしてコナンが平次をつれやってきた場所。そこは・・・公園。

「へ・・・？公園？」

「そ！」

「なんでや？」

「よおく見てみな！」

「・・・？・・・！！！」

「なっ？」

「・・・俺・・・帰る！」

「おい！お前ら！このお兄さんが遊んでくれるってさ！」

「ホントかよ？」

「わーい！」

「何します？」

「お、おい工藤！」

「じゃ！あと任せた！」

「おい！工藤！」

もうおわかりだろうが、公園に居たのは、少年探偵団の、歩美、光

彦、元太の3人だ。

コナンはさっきの怒りを忘れたわけではなかった。
その憂さ晴らしにこの3人組を選んだのだ。

そして3時間後、平次がくたくたになって探偵事務所に来て、コナンと喧嘩をし、和葉に怒られ、コナンが勝ったのは言うまでも無い。

番外編 + α 喧嘩するほど仲がいい?! (後書き)

作者のあとがき

親友へ・・・は完結したのですが、番外編を書いてみたくなり、書いてしまいました。

やっとこのしょぼい小説が終わってホッとしていた皆様、すみませんでした・・・。

これで本当に完結です。

ここまでお付き合いいただいた皆様、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0093a/>

親友へ・・・

2010年10月10日14時59分発行